

太田東西かわら版

おんころころせんだりまとうぎそわか

2021. 7

訪問し、同伴し、最期まで 寄り添い続ける



6月23日水曜日。薬局は息子に任せて、妻と二人で急きょ上京しました。東京で暮らしている義理の母（以下、幸子さん）が吐血して、緊急開腹手術になったからでした。

幸子さんは妻の妹家族と同居していますが、全員が突然の出来事にぼう然……。主治医からの説明も、???状態。そこで「ムンテラ（医師からの病状説明）」に緊急出動したのでした。

ここ数年前から、お客様のご自宅に訪問するHOT（ホット：訪問太田東西）病院に同伴して、主治医からの治療方針・経過の説明を一緒に聞いて考えるDOT（ドット：同伴太田東西）を展開しています。

DOTを開始して2年余り。お客様にはとても好評で喜ばれています。考えてみれば、医学知識のない患者の立場が、CTの画像・血液検査・内視鏡の写真を医師から説明されて、「なるほど、よくわかりました！」と理解できるとは思えません。

「わかったつもり」になっていたり、「難しいことはわからないから、治療はお任せするしかない」とうのが大多数の患者と家族の本音でしょう。

今のDOTの原型は、亡くなった父親に付き添っていたことからです。一緒に病室に入り、病識のない父に代わって、主治医の説明を聞き、疑問点は質問し、納得して治療を受けていました。不要だと思った薬は断っていました。

そして今回、幸子さんにあたっては、本人も家族も突然のこともあって主治医から言われるままの治療で、不安と迷いの中にいました。

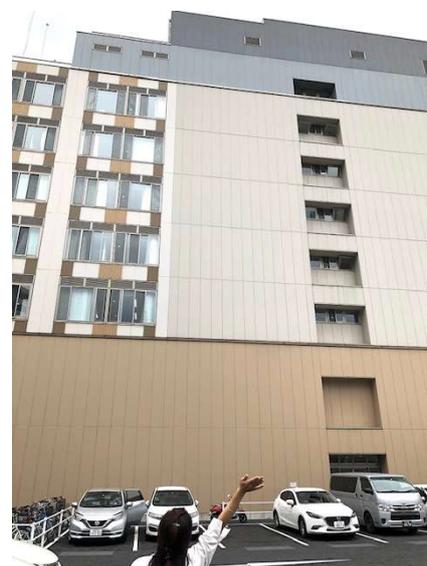
表紙の写真は入院先の病院ですが、もちろんコロナで面会不可。面会は予約制で、その予約も混み合っていて取れない。なんとも東京らしい。

上京した当日も予約は混み合っていて幸子さんとオンライン面会できず・・・

妻は「この辺りの病室に居るのだろう」と駐車場から幸子さんを思って手を振り・・・

コロナ禍の今。健康回復のための病院が、入院をきっかけに“家族が引き離される”場所になったのです。

「会いたいのに、合わせてもらえない」まざまざと体験しました。



孤独な入院生活は、誰でも不安・恐れにさいなまれます。だからこそ、家族が本人に寄り添って、励まし、生きる希望を持たせる必要があるわけですが、長期の入院で「うつ病」になっているケースが増えています。気軽に入院できない時代になったということです。

幸子さんのムンテラには、妻の兄妹もいっしょに参加しました。



説明を一通り聞いて、私は用意していた質問やその時に感じた疑問を投げかけました。丁寧に答えてくれた良心的な主治医でした。

結果、幸子さんの病名は「悪性リンパ腫」。

悪性リンパ腫というのは血液のがんで、外科手術は治療法ではない。ではなぜ、胃摘出手術になったのか？ 胃悪性リンパ腫と胃がんとは、どう違うのか？ リンパ腫はどこにどれくらいあるのか？ 手術前のヘモグロビン値は？ など質問して病状と経過を把握。最後に治療方針、予後余命を尋ねました。

幸子さんは妻の母であり、兄妹がいます。いくら私が医療関係者であったとしても私の独断で治療方針は決められません。そこで待合室に集まって、

「これからどうすることが最善か？」
「85歳で化学療法、妥当なのか？」
「どうして大病を患ったのか？」
話し合いました。



太田東西薬局でも見られることですが、相談者本人が病院の薬よりも漢方で治すことを希望しているのに、“アンチ漢方”のご家族から反対されるケースもあります。ネット検索や知人から得た情報で混乱し、迷い、もめるご家族が増えているとも感じています。

現実、治療にはお金もかかる。家族の誰が決断して、治療費を負い、最後まで責任を持つか？ 本人はどうしたいのか？ どこまで延命治療を望んでいるのか？ 最期を迎える場所は、病院でいいのか？ 在宅医療を希望するのか？ 家族が面会できない今、きちんと事前に話し合っておくことをおすすめします。

幸子さん85歳。なぜ悪性リンパ腫になり、胃に腫瘍ができたのか？
〈新型コロナウイルス騒動〉によって、再三の〈緊急事態宣言〉によって
〈緊急事態の病〉になったと考えられます。

以下は幸子さんと施設に出向いた、1年前の太田東西かわら版の写真です。



義理の父（幸子さんの夫）は認知症になって、施設に入所していましたがコロナの影響で面会ができなくなった。屋外と屋内からの窓越しの面会。それも数分と限られた時間。。。。。

東京は度々の緊急事態宣言発令で、習い事・講座・会食すべてが中止。コロナ前までは、ハーモニカ、体操、プールに通い、お茶のみ友達と出掛けていた幸子さん。それが昨年春から状況が一変。ステイホーム！の厳守。

同居する孫が小さい頃は、おばあちゃん！と頼りにされていた。しかし中学・高校生になった孫たちは自分の事で忙しく、一緒に楽しむ時間などない。夫と生活を共にしていた時は、夫の介護に心身ともにくたびれたものの、一方で毎日やることがあった。

「夫には自分が必要だ！」という意識が、自分の存在価値を維持してくれた。

孫たちの成長、夫の施設入所、コロナの規制、そして日々実感する老い。。。。毎日やることと言えば、部屋でテレビを見るくらい。そんな刺激のない生活の繰り返し「抑うつによる血流（リンパ液）障害」をもたらした。

太田東西薬局のお客様には、幸子さん同様
ピンチ・苦難の際には、コロナを恐れず

訪問し、同伴し、最期まで

寄り添い続けます！



再び乾杯できる日を信じて